

風名	設楽 寛
生物	橘 正道
心理学	東山 篤規

上記のほか、5編のコラムは次のごとくである。

社寺建築の方位	関口 靖之
山で呼ぶヤッホー	長野 覺
葬送空間と方位	浅香 勝輔
便所の位置	磯永 和貴
モンゴルのゲル	古谷 尊彦

序を読んでみると、書名の“読み解き”という意味が分るし、また編者が抱く方位観を理解することができる。いわば序は本書を繙く際の手引ともなるものである。

第1部は地名・地図類(含絵図・測量)を中心に地理学側から方位・方角を仔細に検討している。

第2部は宗教や風水などで問題とされる日神信仰・十方世界・十界思想・八卦方位などを取り上げて方位の基本的関係の考察をしている。

第3部は農作業を規定する方位の在り方や土地・家屋など住生活で注目される恵方・鬼門などを取り上げてそれらと方位との関係を論じている。

第4部ではわが国の古墳築造や古代道の敷設、さらに歴史的、近代的な都市の立地・建設に方位がどのように考えられ、扱われているのかを考察している。

第5部は国々によって宗教・民俗・言語・文化などが違う。したがって方位観も異なる。具体的に国を取り上げて考究している。

第6部は天空・気候そのほか主として自然科学の分野では方位・方角がどのように扱われているかについて個々の分野ごとに述べている。

なお、コラムでは1~6部の各部で述べられていないが、日常生活の面で方位・方角に関して古来よりの言い伝えや慣行などの事柄を取り上げ、各部の論文の補完の役割をしている。

以上、本書の内容を概括的に紹介してみた。地理学が対象とする空間に人々は方位・方角を認識するのである。しかし、最近ではその認識も薄らいできたと編者は「はしがき」で述べている。そのようなとき本書の刊行によってその認識が地理

学的視野のもとに改めて高まることを期待するとともに類書がない本書だけに是非一読をお勧めしたい。

(山寄謹哉)

有薗正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編：『歴史地理調査ハンドブック』

古今書院 2001年5月

A5版 249頁 本体2,800円

概説、原論、研究法という三者の教授内容を示したテキストと用語辞典の存在は、人文・社会科学の極度に細分化された各研究分野にとって、高等教育・社会教育の課程においても広く一般に認知されるために必要な基礎的条件の一つと思われる。本書の出版は、歴史地理学を志す者だけでなく、指導者にとっても意義深いものがある。

歴史地理学の分野においても、概説は1950年代から、原論については1970年代から、用語辞典は1980年代以降、長期にわたって読み継がれている書物が相次いで出版されてきた。数多のロングセラーのなかには、菊地利夫『歴史地理学方法論』大明堂、1977・1987のように、国外にも広く紹介されて日本の研究・教育水準を世界に問うこととなった他に類書をみない歴史地理学原論のテキストもあらわれた。本書は、この大著が世に出た段階では出揃っていなかった調査研究法の動向を執筆陣の歴史地理学観に応じて再構成したハンドブックと位置づけられよう。

「はしがき」には、「…本書は単なる調査の手引書ではないし、いわんや概説書でもなければ、入門書でもない。本書は、芽吹いた歴史地理学の新芽を開花させなければならないと考える研究者が寄り集まって、その新たな方法論と研究手法を共有の財産とし、これを世に問うためのものである。」と出版意図が高らかにうたわれている。本書にかけた編集委員の意気込みがうかがえる。

編集委員を除く執筆者は、青山宏夫、阿由葉司、五十嵐勉、出田和久、伊藤寿和、岩崎公弥、岩鼻通明、上原秀明、宇野隆夫、岡本耕平、木本雅康、小島道裕、後藤雄二、貞方昇、杉浦芳夫、田中智彦、額田雅祐、野間晴雄、平井松午、藤田裕嗣、松尾容孝、森勝彦の22名にのぼる。第一線で活躍中の中堅研究者を総浚えした執筆陣といっ

てよい。

本書の構成は以下に示される。

第1章 歴史地理学の方法と課題

1. 1 歴史地理学の本質
1. 2 歴史地理学と隣接分野
1. 3 歴史地理学の視角と課題

第2章 地域調査と資料

2. 1 地形図・空中写真
2. 2 絵図・地籍図
2. 3 古文書・古記録
2. 4 近代統計類
2. 5 考古資料

第3章 自然環境の復原

3. 1 地形・地質環境
3. 2 平野地形と遺跡
3. 3 乾田化
3. 4 河道変遷
3. 5 地すべり地形と災害

第4章 景観と地名の分析法

4. 1 景観の観察と地名の収集
4. 2 景観プランの検出
4. 3 景観・地名と生活世界

第5章 認識論と史資料の分析方法

5. 1 実在的世界
5. 2 主体的世界
5. 3 抽象的世界

第1章は研究法の総論に相当する。本質理論に関する学説史に続いて、自然環境の復原と景観プラン・景観復原を隣接諸分野に向けて発信した歴史地理学固有の研究方法及び位置づけ、隣接分野から刺激を受けて萌芽したフロンティア領域における資料論の必要性和分析視角が展開されている。歴史地理学が今後解明すべき研究課題についても、コンパクトながら示唆に富む内容を含んでいる。

第2章では、資料とその収集方法が簡潔に整理されている。民俗資料の収集を含むフィールドワークに関する節が設けられていない点で物足りなさを感じるものの、ここで提供されている多様な資料の書誌情報とその利用法に関する参考文献は、初学者にとって過不足のないリストといえよう。

第3章では、自然環境のなかでも地形・地質環境に焦点を当て、その復原法だけではなく、各時

代の人為的地形改変が自然環境全体のなかで果たした役割を評価するという独自性の高い研究課題と方法が示されている。地形環境の復原は、地質学、考古学、土木工学、地球物理学、第四紀学、歴史学などの隣接諸分野との連携が不可欠であるだけに、こうした歴史地理学側からの問題提起は有意義と思われる。日常生活に大きな影響を与えた古気候や古植生の復原法に関する節がみられないのが惜しまれる。

第4章では、歴史地理学が他分野からも一定の評価を受けている景観研究の方法が解説されている。第1節で村落、水利、および交通路に関する景観観察の方法、第2節で古代都市、古代の交通路、条里制、中世の交通路と市場、中世城館、新田集落、および城下町に関する景観プランの検出方法、第3節で地名、村落景観、および宗教景観から生活空間の構造を読み解く方法がそれぞれ具体的に紹介されている。

第5章は本書全体の40%、約100頁を占め、次の点で特色を出している。第一に、H. C. Princeによって提案された① Real World (実在的世界)、② Imagined World (主体的世界)、③ Abstract World (抽象的世界) という地理学が解明してきた3領域の知識類型に基づいて構成されている。わが国の歴史地理学において①は最も重厚な成果が蓄積されてきた伝統的な領域、②はここ数十年の間に著しく進展を遂げている領域、③は未だ萌芽的な領域とみられる。第二に、隣接分野における研究法との異同を意識しながら、歴史地理学固有の史料論の確立を目指している。すなわち、第1節「実在的世界」と第2節「主体的世界」では、重要性の高い史料ごとに項目がたてられ、分析視角、史料の内容、研究法という順序で説明が進む。①の領域における成果は、第3、4章にも紹介されているので、重複を避け、「歴史史料の地理的解釈」に向けての新たな研究法を議論の対象とするためにこのような構成が工夫されたと推測できる。

第1節では、中世検注帳、中世商業文書、近世人口史料、城下絵図、検地帳、近世地誌書、経営帳簿、近代人口統計、および近代産業統計、第2節では、中世絵図、マンガラ図・寺社縁起、道中日記、国絵図、村絵図、近世河川絵図、および農書といった史料が俎上に載っている。第3節の

「抽象的世界」では、ティーセン理論、空間的拡散のシミュレーション、中心地理論、およびフラクタル理論といった計量的手法を過去の集落や空間的行動に適用してモデル構築を試みた事例が紹介されている。ここで取り上げられた史料や計量的手法の選択基準が各節冒頭で鮮明にされていれば、歴史地理学が目指している地平に対する読者の理解が一層深まったと思われる。

本書は、以上のように多岐にわたる内容を250頁という限られたスペースに盛り込んだだけでなく、本質論の多様化を構成に反映した点で特色のある良書である。座右に置くべきハンドブックとして推薦したい。本書の刺激を受けて、歴史地理学に関心を持つ熱心な学生や社会人のファンが増え、研究成果が次々と報告されることを心から期待したい。

「はしがき」で述べられているように、本書は最新の研究法を網羅しているわけではない。たとえば、近年の特色ある動向とみられる花粉分析による自然環境の復原、GISをはじめとする情報処理技術の応用、国外の資料や地域を対象とした研究成果などについてはふれられていない。このことは本書の不足というより、むしろ歴史地理学における新たな試みが積極果敢に行われている状況を示しているといつてよい。隣接分野の『…ハンドブック』のように本書も改訂を重ねて、新しい研究法がそのたびにアップデートされることを望みたい。

(川口 洋)

P. ジャクソン著、徳久球雄・吉富 亨訳：『文化地理学の再構築 意味の地図を描く』(Maps of Meaning: An introduction to Cultural Geography

玉川大学出版部 1999年11月

A 5版 268頁 本体4,500円

目次

序論 意味の地図

- 1章 文化地理学の遺産
- 2章 さまざまな問題と代替案
- 3章 文化とイデオロギー
- 4章 民衆文化と階級の政治力学
- 5章 ジェンダー（社会的性差）と性意識
- 6章 人種差別の言語
- 7章 言語の政治力学

8章 文化地理学の課題

本書は、D. グレゴリー監修による、新しい人文地理学の地平を開拓するシリーズの一冊である。序において、著者ジャクソンは、「文化研究のもっとも重要な思想と最近の人文地理学の発展とを組み合わせ、従来の景観に対する執着からはなれて、それに代わる文化地理の研究手法を採る」と述べ、本書の立場を鮮明に示している。そして、文化が政治的なものであることに注目し、社会科学の諸理論と交流することによって、文化地理学の新たな像を結ぶことをめざす。

1章では学史をふりかえっている。パークレー学派とくにサウアーの文化地理学が文化を超有機体とみるクローバーの文化人類学に依拠していること、その後の自然・人文両方向への文化地理学のさまざまな展開と、文化が人間の行為によって形成されていくという認識の共有が進んだこと、しかし人文方向では文学や自然思想や意識といった人間に主題をすえた人文的探求に過度に傾斜して、社会関係の分析つまり社会科学的関心を軽視してきたことを指摘し、文化地理学を、社会地理学と関心を一本化させて社会科学のなかに位置づけていく必要性を主張している。

2章では、まず、物質的環境から抽象化された「文化」を、安易に思想や現実行動の説明要因とみなす文化主義（例、ヒスパニックの人々は文化的に過密住宅を好む）が、現実が抱える諸問題の分析や解明を不十分なものにする欠点・危険を指摘する。文化主義においては「文化」がブラックボックスとして扱われ、思想や現実行動の背後に潜む本質から目をそらせ、思考停止を余儀なくする。それは、往々、現実世界において政治性を含む諸問題や社会関係に規定された諸問題を「文化」の名のもとにカモフラージュする効果をもつ。

そのような文化主義の限界を開閉する鍵として、物質的条件・社会経済的条件・生産関係などを説明要因とする文化唯物論に依拠した文化研究の必要性を主張する。そして、文化唯物論を模索したR. ウィリアムズの研究を検討し、社会経済史に従属する単純化された「文化」ではなく、個々の歴史状況のなかで、生活全般にわたって現れている有意の仕組みとして文化を提示できる研究可能性がきりひらかれたこと、しかもそのような文化唯物論研究がコスグローブ、ダニエルズ、